

飛鳥宮跡活用検討委員会(第4回)議事記録【公表版】

日 時：平成29年7月14日 13時30分～15時15分

場 所：奈良県文化会館

出 席：委員長 田辺 征夫

委 員 黒田 龍二、小林 牧、櫻井 敏雄、染川 香澄、田島 公
寺西 和子、古瀬 奈津子、松村 洋子、森川 裕一

(欠席：菅谷委員、仲委員、増井委員)

オブザーバ 山下 信一郎(文化庁文化財部記念物課 文化財調査官)

事務局 奈良県公園緑地課

関係課 奈良県 南部東部振興課、文化資源活用課、平城宮跡事業推進室
文化財保存課

明日香村 総合政策課、明日香村文化財課

○本日は、基本構想の骨子案についての議論。どのような項目を盛り込むかなど了解を得られれば成文化していく。

○乙巳の変やそれに続く大化の改新については様々な説、意見があるが、多武峯縁起絵巻のイメージは強烈であり、こうした史実も伝えられるようにすべきである。

○人物を中心にしたストーリーによる活用方策を検討し、その中で、史実やその意義を伝えていけるようなコンテンツを整える。

○史跡に指定された当初の名称は「飛鳥板蓋宮」であったが、発掘調査の成果により、飛鳥岡本宮から連続する宮跡の総体として「飛鳥宮跡」に変更された経緯を踏まえて、史跡としての価値づけを記載すべきである。

○活用検討の対象とする時代に混乱が生じないよう表現を工夫すべきである。

○飛鳥宮跡への来訪者の区分として、修学旅行や遠足等で学びに来る子どもや若者、歴史に興味がある人の個人旅行、外国人観光客を想定する。

○活用の成功は、多様な方々にたくさん来てもらって楽しんでもらえること。建物等を復元するなら、大掛かりでびっくりするようなものを盛り込むべきである。

○体感してもらうことがより分かりやすく大量の情報を発信することになる、という視点が不可欠である。

○飛鳥宮跡の活用の目的のひとつに「地域の誇りを高める取組を展開する」ことを掲げ、地元の視点を忘れずに検討する。

○飛鳥宮跡の活用を「明日香まるごと博物館構想」の一環と考えれば、飛鳥宮跡の空間だけで完結する必要はなく、明日香村内全体でいつでもどこかで見るとい

うことを考えればよい。

- 奈良県が策定する飛鳥宮跡の活用方策を、明日香村全体の中でどのように位置付けるのか、村とよく連携すべきである。また、明日香村が既に策定している「保存活用構想」と整合を図りつつ、県としての活用構想をまとめるべきである。
- イベントを継続して展開していくためには、それを積極的に担う地元のグループ等の参加が必要で、そういう意欲が湧くような環境づくりも大切だ。
- 来訪者へのホスピタリティについては、明日香村と奈良県の「まちづくり連携協定」に基づく飛鳥宮跡周辺のまちづくりについての計画の内容を、飛鳥宮跡の活用検討にも反映する。
- 活用構想はどうしても総花的になりがちだが、活用事例、素材をどのように並べ、メリハリを付けて展開していくか、あらかじめ作戦を練っておくべきである。
- 活用構想をまとめる段階では、イベント等様々な要素を総花的に盛り込んでおく必要がある。最終形である建物の復元も、遺構表示の手法の一つという位置付けで記載している。
- 奈良県としては、時期はともかく、飛鳥宮跡内で塀や建物の復元までできるようにはしたいが、発掘調査、意匠の検討、費用など多くの課題があり、相当の時間がかかると考えられるので、その間の活用方策として、仮設的な構造物による対応案も検討する。
- 飛鳥宮跡を活用するにあたっては、建物の復元等も含め、柔軟に、変化する整備・活用、創造する整備・活用という発想が必要。
- 建物の意匠に関して、基本構想段階では「様々な遺構表示の手法を検討する」という一文に集約して記述し、柔軟に様々な復元の手法を検討する。
- 今後、史跡の整備計画につなげていくために、保存についてもよく検討し、活用と保存を併せて議論すべきである。

○本日いただいたご意見を踏まえ、所要の修正を加えるということで、骨子案を了解し、基本構想案の成文化に向けて作業を進めることとする。